納豆合戦

菊池寛

一

　皆さん、あなた方は、納豆売の声を、聞いたことがありますか。朝寝坊をしないで、早くから眼をさましておられると、朝の六時か七時頃、冬ならば、まだお日様が出ていない薄暗い時分から、
「なっと、なっと、なっとう！」と、あわれっぽい節を付けて、売りに来る声を聞くでしょう。もっとも、納豆売は、田舎には余りいないようですから、田舎に住んでいる方は、まだお聞きになったことがないかも知れませんが、東京の町々では毎朝納豆売が、一人や二人は、きっ

とやって来ます。

私は、どちらかといえば、寝坊ですが、それでも、時々朝まだ暗いうちに、床の中で、眼をさましていると、

「なっと、なっとう！」と、いうあわれっぽい女の納豆売の声を、よく聞きます。

私は、「なっと、なっとう！」という声を聞く度に、私がまだ小学校へ行っていた頃に、納豆売のお婆さんに、いたずらをしたことを思い出すのです。それを、思い出す度に、私は恥しいと思います。悪いことをしたもんだと後悔します。私は、今そのお話をしようと

思います。

私が、まだ十二の時、私の家（いえ）は小石川（こいしかわ）の武島町（たけじまちょう）にありました。そして小石川の伝通院（でんずういん）のそばにある、礫川学校（れきせんがっこう）へ通っていました。私が、近所のお友達四五人と、礫川学校へ行く道で、毎朝納豆売の盲目（めくら）のお婆さんに逢（あ）いました。もう、六十を越しているお婆さんでした。貧乏なお婆さんと見え、冬もボロボロの袷（あわせ）を重ねて、足袋（たび）もはいていないような、可哀（かあい）そうな姿をしておりました。そして、納豆の苞（つと）を、二三十持ちながら、あわれな声で、

「なっと、なっとう！」と、呼びながら売り歩いてい

るのです。杖を突いて、ヨボヨボ歩いている可哀そうな姿を見ると、大抵の家では買ってやるようでありました。

私達は初めのうちは、このお婆さんと擦れ違っても、誰もお婆さんのことなどはかまいませんでしたが、ある日のことです。私達の仲間で、悪戯の大将と言われる豆腐屋の吉公という子が、向うからヨボヨボと歩いて来る、納豆売りのお婆さんの姿を見ると、私達の方を向いて、

「おい、俺がお婆さんに、いたずらをするから、見ておいで。」と言うのです。

私達はよせばよいのにと思いましたが、何しろ、十二という悪戯盛りですから、一体吉公がどんな悪戯をするのか見ていたいという心持もあって、だまって吉公の後からついて行きました。

するとお吉公はお婆さんの傍へつかつかと進んで行って、

「おい、お婆さん、納豆をおくれ。」と言いました。すると、お婆さんは口をもぐもぐさせながら、

「一銭の苞ですか、二銭の苞ですか。」と言いました。

「一銭のだい！」と吉公は叱るように言いました。お婆さんがおずおずと一銭の藁苞を出しかけると、吉公

は、

「それは嫌だ。そっちの方をおくれ。」と、言いながら、いきなりお婆さんの手の中にある二銭の苞を、引ったくってしまいました。お婆さんは、可哀そうに、眼が見えないものですから、一銭の苞の代りに、二銭の苞を取られたことに、気が付きません。吉公から、一銭受け取ると、

「はい、有難うございます」と、言いながら、又ヨボヨボ向うへ行ってしまいました。

吉公は、お婆さんから取った二銭の苞を、私達に見せびらかしながら、

「どうだい、一銭で二銭の苞を、まき上げてやったよ。」と、自分の悪戯を自慢するように言いました。一銭のお金で、二銭の物を取るのは、悪戯というよりも、もっといけない悪いことですが、その頃私達は、まだ何の考もない子供でしたから、そんなに悪いことだとも思わず、吉公がうまく二銭の苞を、取ったことを、何かエライことをでもしたように、感心しました。

「うまくやったね。お婆さん何も知らないで、ハイ有難うございます、と言ったねえ、ハハハハ。」と、私が言いますと、みんなも声を揃えて笑いました。

が、吉公は、お婆さんから、うまく二銭の納豆をま

き上げたといっても、何も学校へ持って行って、喰(た)べるというのではありません。学校へ行くと、吉公は私達に、納豆を一摑(つか)みずつ渡しながら、

「さあ、これから、戦(いくさ)ごっこをするのだ。この納豆が鉄砲丸(てっぽうだま)だよ。これのぶっつけこをするんだ。」と、言いました。私達は二組(ふたくみ)に別れて、雪合戦(ゆきがっせん)をするように納豆合戦をしました。キャッキャッ言いながら、納豆を敵に投げました。そして面白い戦ごっこをしました。

　あくる朝、又私達は、学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢いました。すると、吉公は、

「おい、誰か一銭持っていないか。」と言いました。私

は、昨日の納豆合戦の面白かったことを、思い出しました。私は、早速持っていた一銭を、吉公に渡しました。吉公は、昨日と同じようにして、一銭で二銭の納豆を騙して取りました。その日も、学校で面白い納豆合戦をやりました。

二

その翌日です。私達は、又学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢いました。その日は、吉公ばかりでありません。私もつい面白くなって、一銭で二銭の苞を

騙して取りました。すると、外の友達も、
「俺にも、一銭のをおくれ。」と、言いながら、みんな二銭の苞を、騙して取りました。お婆さんが、
「はい、有難うございます。」と、言っているうちに、お婆さんの手の中の二銭の苞は、見る間に二つ三つになってしまいました。

　そのあくる日も、そのあくる日も、私達はこのお婆さんから、二銭の苞を騙して取りました。人の良いお婆さんも、家へ帰って売上げ高を、勘定して見ると、お金が足りないので、私達に騙されるのに、気がついたのでしょう。そっと、交番のお巡査さんに、言いつ

けたと見えます。

お婆さんが、お巡査さんに言ったとは、夢にも知らない私達は、ある朝、お婆さんに出くわすと、いつもの吉公が、

「さあ、今日（きょう）も鉄砲丸を買わなきゃならないぞ。」と、

言いながら、お婆さんの傍（そば）へ寄ると、

「おい、お婆さん、一銭のを貰うぜ。」と、言いながら、何時（いつ）ものように、二銭の苞を取ろうとしました。すると、丁度その時です。急に、グッグッという靴（くつ）の音がして、お巡査さんが、急いで馳（か）けつけて来たかと思うと、二銭の苞を握っている吉公の右の手首を、グッと

握りしめました。

「おい、お前は、いくらの納豆を買ったのだ。」とお巡査さんが、怖しい声で聞きました。いくら餓鬼大将の吉公だといって、お巡査さんに逢っちゃ堪りません。蒼くなって、ブルブル顫えながら、

「一銭のです、一銭のです。」と、泣き声で言いました。

すると、お巡査さんは、

「太い奴だ。これは二銭の苞じゃないか。この間中から、このお婆さんが、納豆を盗まれる盗まれると、こぼしていたが、お前達が、こんな悪戯をやっていたのか。さあ、交番へ来い。」と、言いながら、吉公を引き

ずって行こうとしました。吉公は、おいおい泣き出しました。私達も、吉公と同じ悪いことをしているのですから、みんな蒼くなって、ブルブル顫えていました。すると、吉公はお巡査（まわり）さんに引きずられながら、「私一人じゃありません。みんなもしたのです。私一人じゃありません。」と言ってしまいました。するとお巡査（まわり）さんは、恐（こわ）い眼で、私達を睨（にら）みながら、

「じゃ、みんなの名前を言ってご覧。」と言いました。

そう言われると、私達はもう堪らなくなって、

「わあッ。」と、一ぺんに泣き出しました。

すると、傍（そば）にじっと立っていた納豆売のお婆さんで

す。私達が、一緒に泣き出す声を聞くと、急に盲目の眼を、ショボショボさせたかと思うと、お巡査さんの方へ、手さぐりに寄りながら、

「もう、旦那さん、勘忍して下さい。ホンのこの坊ちゃん達のいたずらだ。悪気でしたのじゃありません。いい加減に、勘忍してあげてお呉んなさい。」と、まだ眼を光らしているお巡査さんをなだめました。見ると、お婆さんは、眼に一杯涙を湛えているのです。お巡査さんは、お婆さんの言葉を聞くと、やっと吉公の手を離して、

「お婆さんが、そう言うのなら、勘弁してやろう。も

う一度、こんなことをすると、承知をしないぞ。」と、言いながら、向うへ行ってしまいました。すると、お婆さんは、やっと安心したように、

「さあ、坊ちゃん方、はやく学校へいらっしゃい。今度から、もうこのお婆さんに、悪戯をなさるのではありませんよ。」と言いました。私は、お婆さんの眼の見えない顔を見ていると穴の中へでも、這入りたいような恥しさと、悪いことをしたという後悔とで、心の中が一杯になりました。

　このことがあってから、私達がぷっつりと、この悪戯を止めたのは、申す迄もありません。その上、餓鬼

大将の吉公さえ、前よりはよほどおとなしくなったように見えました。私は、納豆売のお婆さんに、恩返しのため何かしてやらねばならないと思いました。それでその日学校から、家（うち）へ帰ると、

「家では、納豆を少しも買わないの。」と、お母（つか）さんに、ききました。

「お前は、納豆を喰（た）べたいのかい。」と、お母（つか）さんがきき返しました。

「喰べたくはないんだけれど、可哀（かあい）そうな納豆売のお婆さんがいるから。」と言いました。

「お前が、そういう心掛（こころがけ）で買うのなら、時々は買って

もいい。お父様は、お好きな方なのだから。」と、お母さんは言いました。それから、毎朝、お婆さんの声が聞えると、お金を貰って納豆を買いました。そして、そのお婆さんが、来なくなる時まで、私は大抵毎朝、お婆さんから納豆を買いました。

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社
１９５５（昭和30）年６月25日発行
１９７４（昭和49）年９月10日29刷改版
１９８９（平成元）年10月15日48刷
底本の親本：「赤い鳥　復刻版」日本近代文学館
１９６８（昭和43）年〜１９６９（昭和44）年
初出：「赤い鳥」
１９１９（大正８）年９月号
入力：林　幸雄
校正：鈴木厚司
２００５年６月16日作成